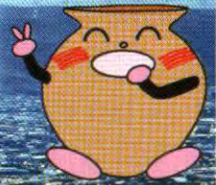


八尾・よろず考古通信

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌 年2回発行



平成 24 年度秋季企画展『やおの弥生時代Ⅱ(後期)ー弥生時代から邪馬台国時代へー』から

1. はじめに

24 年度の秋季企画展として、八尾市内の弥生時代後期(約 1,950~1,700 年前)を対象とした『やおの弥生時代Ⅱ(後期)ー弥生時代から邪馬台国へー』と題した展示を行いました。

展示では、「Ⅰ 弥生時代後期の河内平野の自然環境」「Ⅱ 弥生時代後期のムラ」「Ⅲ 弥生時代後期の市域のムラのように」「Ⅳ 弥生時代後期の生活道具」「Ⅴ 弥生時代のまつりとの道具」「Ⅵ 弥生時代から邪馬台国時代へ」の小題を設け、弥生時代後期から古墳時代が始まる邪馬台国時代(古墳時代初頭)までの時期を対象として、八尾の人々が自然環境の変化や社会情勢の変化のなかで、どのような生活文化を営んでいたのかを考えてみました。ここでは、これらの一部を抜粋して紹介します。

2. 弥生時代後期の河内平野の自然環境

弥生時代の河内平野の環境は、淡水と海水が混じった弥生時代前期の河内潟の時期を経て、弥生時代中期には河内湖に変化します。中期前葉(BC 2 C)における河内湖の湖岸線は、新家遺跡(東大阪市新家東町)付近と想定されますが、中期中葉(BC 1 C)には南側に位置する瓜生堂遺跡(東大阪市瓜生堂三丁目)一帯まで前進したことが調査成果で示されています。花粉分析からみた植生においても、中期に拡大したシダ類・ヨモギ属を中心とする草原が、弥生時代中期後葉~後期初頭(1 C 前~中)にはカヤツリグサ科を中心とする湿原に変化したことが指摘されています。このような自然環境の急激な変化は、河内平野内の随所で湿地帯の増加による生活空間の減少を招きました。後期前半(1 C 前)の集落が前代に比べて激減する理由の一つと考えられます。さらに後期前半末(1 C 末)頃には、市域平野部の山賀遺跡・久宝寺遺跡・八尾南遺跡等で厚さ 1.0m 近くにおよぶ河川氾濫に伴う砂の堆積が広範囲にわたって見られます。この時期、平野部の景観を一変させ、集落廃絶を余儀なくさせた大洪水が発生したことがわかります。市域の後期集落は、不安定な自然環境に左右されながら集落を継続して営んでいたことが推定されます。

表 1 縄文時代晩期~古墳時代前期の時期区分

| 年 | 世紀 | 時代 | 時期 | 細分 | 土器編年 |
|-------|---------|------|----|----------|-----------|
| BC400 | 紀元前 5世紀 | 縄文時代 | 晩期 | 末 | 長原 |
| BC300 | 紀元前 4世紀 | | | 古段階 | 畿内第Ⅰ様式(古) |
| BC200 | 紀元前 3世紀 | 弥生時代 | 前期 | 中段階 | 畿内第Ⅰ様式(中) |
| BC100 | 紀元前 2世紀 | | | 新段階 | 畿内第Ⅰ様式(新) |
| 0 | 紀元前 1世紀 | | 中期 | 前葉 | 畿内第Ⅱ様式 |
| | | | 後葉 | 畿内第Ⅲ様式 | |
| AD100 | 1世紀 | 後期 | 前半 | 畿内第Ⅳ様式 | |
| AD200 | 2世紀 | 古墳時代 | 前期 | 後半 | 畿内第Ⅴ様式(古) |
| AD300 | 3世紀 | | | 初頭 | 畿内第Ⅴ様式(新) |
| | | | | 庄内式(古~新) | |

*実年代は従来の説による。本書の時期細分は本表を使用。

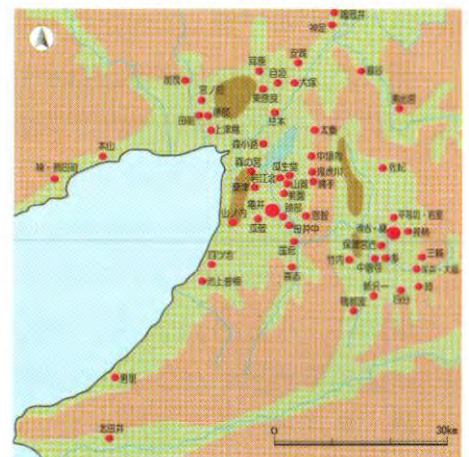


図 1 畿内の主な弥生時代の遺跡



図 2 八尾市域の弥生時代後期~古墳時代初頭前半(庄内式古相)の集落位置図

目次 ◆平成 24 年度秋季企画展『やおの弥生時代Ⅱ(後期)ー弥生時代から邪馬台国時代へー』から(p 1~3)、
◆平成 24 年度のイベントから(p 3) ◆よろず考古学コラム第8回(p 4)、イベント案内/編集後記(p 4)

3. 弥生時代後期の市域のムラのように

①火事にあった家が見つかったムラ(西郡遺跡-幸町一丁目)

この調査では、後期後半のムラを構成した^{たてあな}竪穴住居・井戸・土坑・溝・小穴が見つかりました。なかでも2棟発見された竪穴住居(竪穴住居1・2)は火事により焼失した家で、この火事が原因で集落を廃棄した可能性も考えられます。後期の焼失住居は、市域では太田遺跡のほか大阪市の城山遺跡等で見つっています。



写真1
焼けた建築部材
が残る家
(竪穴住居1)



写真2 火事にあった2棟の
竪穴住居が見つかったムラ

②洪水で埋まったムラ(八尾南遺跡-若林三丁目)

河川氾濫による洪水砂で埋没したムラが八尾南遺跡の南部で見つかりました。洪水は後期前半末(1C末)に発生したもので、集落内を南北に流れる自然河川を中心に、洪水砂が20~80cmにわたり堆積し、ムラを埋め尽くしました。この洪水砂で埋まったムラからは、竪穴住居10棟のほか、井戸・土坑・溝・自然流路や木材を貯めた貯木遺構^{ちよぼく}などで構成される居住域(図3)とその西側に水田・水路からなる生産域が確認されています。なかでも、竪穴住居については、住居を取り巻く周堤^{しゅうてい}があり、内部に壁溝^{へきこう}をおお覆った木質が残っていたことから、壁溝に蓋を持つ構造の竪穴住居であったことが確認されました。このように、八尾南遺跡のムラ跡は、当時の集落の規模や建物の配置などの実態を推定するうえで、貴重な第1級資料です。



写真3 周堤を持つ竪穴住居(弥生時代後期前半)
(写真提供:公益財団法人大阪府文化財センター)

この時期、市域の中央部を北東から北西に流れていた「東郷^{とうごう}分流路^{ぶんりゅうろ}」が洪水により廃絶し、それに代わる新たな流路として東側に「小阪合分流路^{こさかあいぶんりゅうろ}」が成立しています。このように、この時期の平野部のムラは、不安定な自然環境に左右される状況下であったことが推定されます。



図3 洪水で埋まった八尾南遺跡のムラ

③鉄剣を保有したムラ(大竹西遺跡-楽音寺一丁目)

大竹西遺跡の弥生時代後期の居住域は、東部の生駒山地西麓部から西部の河内平野にかけて広がっています。なかでも、居住域が拡大するのは後期後半(2C)で、南部に隣接する太田川遺跡を含めて東西約1.1km、南北約800mの大規模な集落で、市域の弥生時代後期の集落では最大級の規模です。後期後半の大竹西遺跡の居住域は、生駒山地西麓部からの小川が西方向に流れているため、これらの河川により区画された空間に成立した小規模なムラが点在する散村的な集落形態であったと推定されます。一方水田を中心とする生産域は、居住域西側の平野部に設けられています。なお、第3次調査では近畿地方最古級の^{ちゅうぞうてつけん}鑄造鉄剣(後期初頭-1C中)が埋納された土坑が発見されました。この地点は、集落の西端部にあたるため、集落内に侵入する様々な災いからムラを守るために埋納された鉄剣であった可能性があります。大竹西遺跡の鑄造鉄剣は、広範囲に点在した各ムラを代表する有力者の所有物であった可能性があります。



写真4 鉄剣出土状況



写真5(上) 鉄剣と板状木製品
写真6(右) 鑄造鉄剣
《大竹西遺跡第3次調査》

④ 土器が大量に捨てられたムラ(弓削・郡川・久宝寺・八尾南遺跡)

この時期、中河内地域の各遺跡で溝のなかに大量の土器を廃棄する行為が行われていました。市域では弓削・郡川・久宝寺・東郷・八尾南遺跡で見つかっています。弓削遺跡第1次調査では、約500個の土器、東大阪市の段上遺跡では、円形状に廻らせた径約80m、幅1～2mの溝から約2,000個以上の土器が出土した例があります。土器は短期間に廃棄され、一括性の高いものです。人為的に打ち欠いたり、孔を開けた祭祀用とみられる土器を含む場合があります。検出位置は、居住域から離れた場所にある溝が大半です。このような行為の歴史的背景には、中国の史書『魏志倭人伝』などに記された「倭国乱」に代表される緊迫した社会情勢に対応した集落移動や銅鐸の終焉に伴う大規模な祭祀等が考えられます。



写真7 溝内から大量の土器類が出土したようす(後期後半) <<弓削遺跡第1次>>

⑤ 高地性集落(花岡山遺跡-楽音寺六丁目・郡川遺跡-郡川五丁目)

弥生時代の集落は、平地に設けられたものが大半です。しかし、弥生時代中期後葉～後期(1～2C)にかけて、高い丘陵上や尾根上に集落を営む例が見られます。これらの集落を「高地性集落」と呼んでいます。一概には言えませんが、「倭国乱」と言われる列島内の内乱あるいは東アジアの動乱との関わりから、戦争などに対応する防御や見張りの機能を持った集落と考えられています。

中河内地域においては、生駒山地西麓部の標高63～270m付近で確認されています。時期は、中期後葉(1C前)の山畑遺跡(東大阪市)を除けば、後期前半(1C中)以降のもので岩滝山遺跡(東大阪市)、花岡山遺跡・郡川遺跡(八尾市)、高尾山山頂遺跡(柏原市)などがあります。これらの集落の眼下には河内平野、さらに大阪湾・明石海峡、北に摂津地域、南に和泉地域を一望することができ、防御や見張り台に適した立地環境といえます。なかでも、「倭国乱」の時期にあたる後期後半は、強力な武器となる銅鏃出土の増加時期とも符合することから何らかの関わりがあった可能性が考えられます。



図4 大阪府下を中心とした弥生時代後期の高地性集落と土器の大量廃棄が見られた遺跡



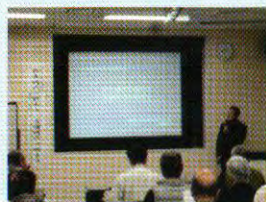
平成24年度のイベントから

● 秋季企画展関連講演会の開催

2012/10/28(日)、2013/1/27(日)

秋季企画展「やおの弥生時代Ⅱ(後期)-弥生時代から邪馬台国時代へ-」に関連して、「弥生時代の終わり、古墳時代の始まり」、「倭国大乱から邪馬台国成立時期の八尾」と題した講演会を開催しました。

多くの市民の方々が参加され、講演後に数多くの質問が寄せられるなど、邪馬台国に対する興味・関心の高さを改めて実感しました。



● 大人のための考古学入門講座

2013/2/9・16・23(土)

大人を対象とした考古学入門講座を行いました。3日間にわたり、「埋蔵文化財の調査方法」「遺構・遺物の見方と変遷」「石器の変遷と石包丁の製作」について体験学習を行いました。

発掘調査の方法や見方、本物の土器や石器を使った体験学習を通して原始・古代を体感されたことと思います。



かわちがたしょうないじきかめ ふるしきかめ
河内型庄内式甕から布留式甕への変化

「布留式土器」は「庄内式土器」に続くもので、3世紀後半から4世紀代の古墳時代前期を代表する土器様式です。

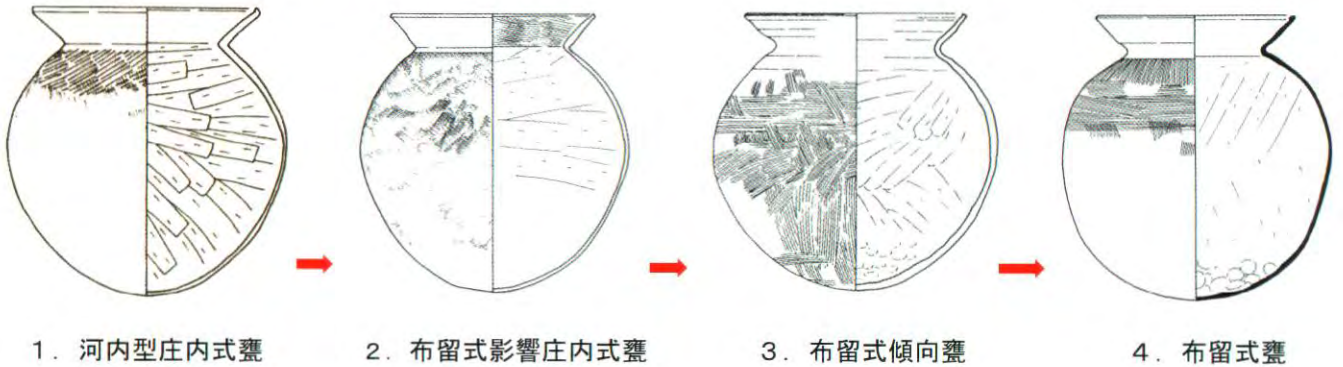
なかでも布留式を代表する布留式甕は、山陰系および北陸系甕の影響を受けて成立した甕で、口縁部の内部肥厚^{ひこう}や外面のハケ調整と庄内式甕から引き続く内面のヘラケズリ技法が特徴です。

布留式甕をはじめとする「布留式土器」が使われた古墳時代前期前半(3C後半)は、庄内式期に見られた各地域を代表する河内型や大和型庄内式甕のような個性を持つ土器様式が一掃され、画一化された土器様式に変化した時期にあたります。

また布留式土器の成立時期は、ヤマトを中心に大規模な前方後円墳の築造を頂点とする社会体制が整備された初期ヤマト王権の形成時期にあたることから、古墳文化の拡散とも同調して、日本列島の広範囲にわたって使用された土器様式と考えられています。



写真8 布留式甕(3C後半)
《東郷遺跡第71次》



河内型庄内式甕から布留式甕への変化 ①体部外面の調整 ②口縁屈曲部の形状 ③口縁端部の形状 ④素地(胎土)

| 1. 河内型庄内式甕 | 2. 布留式影響庄内式甕 | 3. 布留式傾向甕 | 4. 布留式甕 |
|--|--|---|--|
| ①細筋のタタキを体部上位に施す ②「く」の字 ③摘み上げる ④角閃石を含む | ①ハケ調整 ②「く」の字 ③摘み上げ ④角閃石を含む、含まない | ①ハケ調整 ②丸味を持つ、持たない ③摘み上げ、内面肥厚 ④角閃石を含まない | ①ハケ調整 ②丸味を持つ ③内側に肥厚 ④角閃石を含まない |



カマッキー君

編集後記

コラムで俎上に挙げた布留式甕は、初期ヤマト王権の波及に同調した画一性の高い甕である。その中で、一つ個性と呼べるものを探せば、稀に体部外面上位に施された列点文がある。棒先なしは杵を使用した圧痕で2~4個が集中して施されている。吉備地方の古墳時代初頭の甕に見られる風習が布留式甕にも受け継がれたのであろうか？私は、この痕跡を米粒と理解し、米を含む食料への「畏敬の念」を調理に使った甕に託したものと考えたい。土器に残された微細な情報ですが、「小さなことからこつこつと」をキャッチフレーズとした政治家のように、これが考古学の原点と考えます。(MH)

イベント案内

- ◆通常展「八尾の地宝—埋蔵文化財調査センター収蔵品—」
内容：八尾市域から出土した旧石器時代から奈良時代の出土遺物を中心に展示
期間：平成25年2月27日(水)~6月14日(金)
時間：午前9時~午後5時(入館は午後4時半まで)
休館日：土、日、祝日
- ◆講演会等「やお・埋蔵文化財トークーあの遺跡・遺物は今—」
演題：小阪合遺跡の水辺の祭祀につて
講師：樋口 薫(公財)八尾市文化財調査研究会
日時：平成25年5月26日(日)午後1時30分~(先着30名、資料代200円)



メノウちゃん

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌
『八尾・よろず考古通信 第8号』
発行：2013年3月31日、八尾市立埋蔵文化財調査センター
(編集：公益財団法人八尾市文化財調査研究会)
〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX072-994-4700
URL http://www.kawachi.zaq.ne.jp/zyao_maibun/center/
E-mail maibun_zyao@kawachi.zaq.ne.jp